

〔千載和歌集^{戀十}四〕崇徳院に百首歌奉りける時、戀の歌とてよめる、皇太后宮大夫俊成戀をのみしかまの市にたつ民もたえぬ思に身をやかへてん

〔播磨名所巡覽圖會^五〕室津 室の泊 室の浦

當津は播州の一都會にして、西國大名參勤往來の著岸と定め、又乗船の津とも定む、帝畿を去事四十二里、山は三面に裏みて、江灣は一方に、^透海、海上百里美景を觀望し、泊船は池中に遊ぶがごとく、旅客は波上に枕を安んず、峯には樵夫の斧を響し、岸には遊女の糸竹に媚き、國守の艤に海士の綱手を潛せ、誠に貴賤苦樂窮覽の界なり、室とは人の居室の事也、故に此江の取まはしこもりたるにたとへていへり、

〔播磨めぐり〕室津 姫路より五里、網干より二里に近し、西國よりの船著にて、はんぞやうの湊なり、

〔續應仁後記^一〕柳本彈正遭殺害事附播州騷亂事

大永二年二月廿七日ノ夜、村宗情無クモ花房菅野岩井ナンド、云者共ヲ遣シテ、播州ノ室ノ津ニテ、忽主君義村入道定印ヲ弑シケリ、

〔播磨名所巡覽圖會^四〕姫路鎮城、^中姫山の麓に三村あり、所謂宿村中村國府寺村是也、輝政入府の後、此三村を都て姫地と號す、^後姫路^{改む}

〔播磨めぐり〕姫路 御城は山手にあり、城下町多し、はんぞやうの所なり、

〔豐鑑^{長濱真砂}〕小寺官兵衛申しは、此所^木三は播磨にとりてはかたつかたなり、我すみぬる姫路こそ國の中にして、舟の便もよし、此國をゑらん人は、此所こそよかるべけれ、姫路にうつり住給ふべしと、ゑきりにいひければ、秀吉内々よかるべき所になんと思ひ給へりければ、姫路にうつり給ひぬ、